

〔後水尾院當時年中行事上正月〕十七日舞御覽あり、清涼殿東庭左右の樂屋をかまふ、ひさしに翠簾かけわたして御見物所とす。先鶴庖丁あり、小預是を奉仕す。事終りて御太刀をたぶ藏人東かいにのぞみて是を下す。

〔御湯殿の上の日記〕天正十五年正月十七日、せいりやうでんの御庭にて、たかはしつるのはうち。やうする御たちくださる、きよくらういださる、まい御らんあり、色々めでたきまいどもまいしなり、ふしみ殿、かぢ井殿、御まいり、とざまないく御参り、せいりやうでんにて、みなくつるのこん参る、二のみやの御かた、五の宮の御かた、ふしみどのかぢ井殿、御しやうばん、もんせきへは御しやうじん也。だい出でてもじあり、ぐ御にはつねの御所にて参る、じゆごう女御、御しやうばん女中ひしくと参る、だいにてくもじ参る、めでたしく。

〔續視聽草八集三〕庖丁上覽

寛文五己巳年二月十二日、御黒書院鶴庖丁上覽。天野五郎太夫勤之、老中高家諸役人見物御目見、入御已後御振廻、御代官も布衣之分罷出、五郎太夫江時服拜領、如官日簿。

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十一月廿一日、黒木書院にて鶴の庖丁御覽あり、鶴に庖丁魚筋を俎にのせて、中奥の小姓二人にて持出て、東縁の下段の闌の外にすゝ、ときには臺所頭小林貞右衛門祐良、戸目長の袴つけて出、鶴を調理す、事はて、はじめのごとく中奥小姓出て俎を撤す。祐良はこの事つかふまつりしをもて、時ふく一襲をたまふ。

〔續視聽草八集三〕庖丁上覽

安永四丁未年十二月廿五日、於奥鶴庖丁上覽、御臺所頭松尾彌兵衛勤之、安永日錄。

〔武家調味故實〕一雁切事、一の刀に二の羽ぶしをして口切てさしかさねて後、一の羽ぶしを重て可切事、大事成べきなり、かさね羽ぶし是也、身をおろす事、ふつうのごとし、但うしろを前にかきま